国　語　科　授　業　案

日　時　平成 26 年 2 月 20 日（木）4 校時
生　徒　1 年 B 組　男子 13 名　女子 21 名 計 34 名
授業場　1 年 B 組教室
授業者　太田　　諭

１　単元名　「文章名人になろう３」根拠を明確にして書くには～芸術作品の鑑賞文を書こう～

２　単元について

(1)　教材観

ＯＥＣＤによる国際的な学力調査の結果等を受け，我が国の青少年のいわゆる「読解力低下」が指摘されて久しい。また，全国学力・学習状況調査の結果からは，北海道の青少年の課題として「読む能力」と「書く能力」を連動させることに弱さがあるという実態がある。「読めたかどうか」を判定する手段が，「書くこと」による表現であるように，「読む能力」と「書く能力」は表裏一体であるといえる。文章の内容を理解していたとしても，それを上手く表現できなければ，「読めた」ことにはならないのである。したがって，自分の考えを相手に正確に伝えるために，「書く能力」の育成は極めて重要である。

そもそも「書く」ということは，非常に広範な思考を伴う作業である。なぜなら，目の前にいない読み手を想像し，説明不足に陥らぬように書くには，よほどの注意力を払わなければならないからだ。また，相手や目的によって文体や表現を変えるなどの工夫も必要となる。

国語科において，そうした難しさを抱える「書く能力」を育成するためには，小中学校９カ年にわたる指導事項を明確にした上で，それらを段階的かつ継続的に身につける必要がある。

教育出版版中学校１年生用教科書では，「書くこと」の教材として，「文章名人　書くプロセス０～５」「全過程　情報を選び効果的に伝えるには」が配置されている。「文章名人」では，様々な形式の文章について「題材収集・構成・記述・推敲・相互批評」といった段階を踏まえて書くことを学習する。この「文章名人」のように指導事項を重点化することは極めて重要であると考える。

本単元にあたる，「文章名人３　根拠を明確に」は指導事項として「記述」を中心とし，「美術作品（絵画）の鑑賞文」を書くという言語活動を設定している。「鑑賞文」とは，「対象となるもののよさを，根拠を明らかにして，論理的に説明した文章」であり，生徒がこれまで多く書いてきた「感想」を書くという行為から一歩進んだものとなる。また，「鑑賞文」の「よさを論理的に伝える」という特性から，相手意識や目的意識，根拠を明確にする必要感が生じる活動であると考える。

(2)　生徒観　省略

(3)　指導観

以上のことから，本単元においては，まず，既習事項である「主述のねじれ」等に気付くことができるようにするための手だてとして，プレポストとして穴埋め問題を提示する。そのことにより，ねじれのない文を書くという意識と高めることができると考える。

次に，今回の研究の視点に関わる手だてを述べる。

国語科では、小中共通の教科主題を「自ら言葉にはたらきかけ、言葉の価値に気付く児童・生徒の育成　～身に付けるべき言葉の力を明確にした『単元を貫く言語活動』を通して～」と設定した。主題はそのまま国語科として自律的に学ぶ児童・生徒の姿を表現したものである。中学校としてそうした姿に近づけるために、以下の手だてを設定する。

（１）　「やるべきこと」「やりたいこと」「やれること」の関係から

「やるべきこと」の中に「やりたいこと」を見いだすための手だて

～獲得すべき言葉の力を明確にした「単元を貫く言語活動」の設定～

国語科における「やるべきこと」とは，「指導事項の定着」であり，「やれること」とは，「既に定着した指導事項」である。そして，「やりたいこと」とは，生徒の関心・意欲の方向となる。生徒が「やるべきこと」の中に「やりたいこと」を見いだすということが，自律的な学習に繋がると考えている。

言語活動は，教授型の学習から主体的・自律的学習への転化を図るためのものでもある。したがって，言語活動の質を高めることが，生徒の「知的好奇心」を揺さぶり，自律的な学習を生み出すことになると考える。ただし，言語活動が目的化してしまうと，本来生徒が身に付けるべき指導事項がぶれてしまう危険性もある。したがって，獲得すべき言葉の力を明確にすることが必要である。

本単元においては，「根拠を明確にして，美術作品の鑑賞文を書く」という言語活動を設定することが手だてとなる。また，様々な想像をかき立てられる余地のあるムンクの「叫び」を共通題材として設定し，その後に生徒の興味・関心に応じた美術作品を選定するようにする。

（２）「言語化」を通して　～振り返りの記述における視点の明確化～

「やれること」つまり現時点で自分にどのような力があるのかを，生徒自身がわかっていなければ，新たな指導事項の習得も難しいものになるであろう。そのような課題を解決するために「言語化」を用いる。

具体的には，単元および本時の最終段階において，自身の活動を振り返り記述する活動を設定する。ただし，その際には，ねらいに照らしてどのような成果と課題があったのかが明確になるよう，ワークシートの工夫を行う。従来，「反省」や「感想」といったように漠然と記述していたところの視点を明確にすることによって，「やるべきこと」「やれること」「やれなかったこと」等が明確になると考える。

（３）「共同」「協同」「協働」の場を通して　～作品交流の場の設定（協同）～

「書くこと」の学習において，他者の作品と比較，検討することは非常に重要である。なぜなら自分自身の思考のみから作品の質を高めることは，非常に難しい営みだからである。そこで，第３時に，「鑑賞文の交流の場」を設定する。「どうすればよりよい表現になるのか」を話し合うことにより，他者の優れた点に気付かせることで，文字表現力の高まりを期待したい。

３　単元目標

「芸術作品の鑑賞文を書く」という言語活動を通して，接続詞等を適切に用いて根拠を明確にした文章を書くことができるようにする。また，自分の思いをよりよく伝えるために，根拠となる部分を示す表現など，言葉を吟味しようとする態度を培う。

中心となる指導事項と言語活動例

ウ　伝えたい事実や事柄について，自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。

ア　関心のある芸術的な作品などについて，鑑賞したことを文章に書くこと。

4　評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	言語に関する知識・理解
ア「鑑賞文」を書いたり，交流したりする際に，根拠となる部分を示す表現など，言葉について吟味しようとしている。	ア作品のよさについて，根拠に基づいて論理的に説明した文章を書いている。	ア主述のねじれがないかなど，叙述の関係性に注意している。 イ文のつながりにおいて，接続詞等を適切に用いている。

5　単元計画（全３時間）

時	学　習　事　項	主な学習活動・ 手立て	評価 関	評価 書	評価 言
1 本時	●モデルとなる「鑑賞文」を書くことを通して，根拠を明確にする方法を習得する。	○単元の見通しをもつ。（１） ○プレテストを行い,主述のねじれ等に注意する視点を持つ。 ○「鑑賞文」の要素となる「作品の第一印象」とその根拠について記述する。 ○「鑑賞文」の要素となる「作品の特長」とその根拠について３つ以上記述する。 ○本時の振り返りをする。（２）	ア	ア	ア
2	●独自の「鑑賞文」を書くことを通して，根拠を明確にする方法を活用し，定着させる。	○前時に習得した方法を用いて，自分の選んだ「絵画」の「鑑賞文」を書く。 ○本時の振り返りをする。（２）	ア	ア	イ
3	●「鑑賞文」の交流を通して，自分の作品の参考にする。	○班内での相互交流を通して，「絵のよさ」を最もよく説明できている文章を選び，理由を明らかにする。（３） ○班の代表作品を全体で交流し，学級で最もよく説明できている文章を選び，理由を明らかにする。（３） ○単元の振り返りをする。（２）	ア		

6　本時案（１／３時間目）

(1)　本時の目標

「鑑賞文」を書くためのポイントを知り，根拠を明確にして作品の特長を記述することができる。

(2)　本時の展開　　（○…発問，△…補助発問，□…指示・説明）

主な学習活動	教師の働きかけ・ 手立て	【評価方法】・備考

1　単元のねらいを知り，学習の見通しをもつことができる。	□今日から３時間，「書くこと」の学習をします。	・ねらいと単元の流れを掲示
～根拠を明確にして，美術作品の鑑賞文を書こう～	（1）	
2　プレテストを行うことによって，主述のねじれ等に気を付けることができているかどうかについて自覚することができる。	□これから，ある作品の鑑賞文を配ります。（　　）に入る言葉を考え，鑑賞文を完成させましょう。	・机間指導 【ワークシート】
3　文の呼応関係によって入る言葉がある程度の範囲に収まることを説明することができる。	○どんな表現が入りましたか。どうしてその表現になりましたか。 ・この鑑賞文は，何という作品のものかわかりますか。	・「モナ・リザ」を掲示する。
4　例示により，「鑑賞文」のポイントを知ることができる。 ※具体的な特長の根拠となる視点 ・形　・線　・光と影　・構図 ・画面　・写実　・色彩　・対比 ・主題　・焦点　・イメージ	□このような文章を「鑑賞文」といいます。「鑑賞文」にはいろいろな書き方がありますが，ここでは，第一印象とその根拠・次いでより具体的な特長とその根拠を挙げていくという形で書きましょう。	
5　ムンクの「叫び」を観ての第一印象を記述することができる。	○では，いよいよ鑑賞文を書き始めます。この作品の第一印象はどんなものですか。	・ムンクの「叫び」を掲示する。 ・机間指導
6　第一印象を交流することで，自他の感じ方の違いを認識することができる。	□交流してみましょう。	
7　自分の書いた第一印象を，作品の特長としての言葉に変換することができる。	○みんなの第一印象は，特長になっているでしょうか。ねらいに沿った場合の書き方にしてみましょう。 □どんな言葉をどのように変えたか教えてください。	【ワークシート】
8　第一印象の根拠となる事柄を絵の中から見つけ，説明することができる。	○その印象は，絵のどのような特長から生まれたものですか。	【ワークシート】
9　より具体的な特長とその根拠となる事柄が明確にわかるように，視点を参考に３つ以上記述することができる。	□より具体的な特長とそこ根拠となる事柄を３つ以上探し，根拠と意見とが明確に分かるように書きましょう。その際には，視点を参考にしましょう。	・机間指導 【ワークシート】
１０　班で交流し，特長と根拠が妥当であるかどうかを吟味することができる。	□班で交流しましょう。　（2）	

１１　本時の振り返りを通して，本時のねらいが達成されたかどうかを判断することができる。	□今日の学習のねらいが達成されたかどうかを記述しましょう。 （３）	【ワークシート】

国語科教科主題

自ら言葉にはたらきかけ、言葉の価値に気付く児童・生徒の育成
～身に付けるべき言葉の力を明確にした「単元を貫く言語活動」を通して～

本校国語科では
自ら言葉にはたらきかけ→積極的に言葉を用いると同時に、よりよい言葉を志向する。

１，主題設定の理由

国語力は、他教科のみならず日常生活・社会生活を送る上での基礎となる重要なものであるが、児童・生徒は小学校に入学する前から、一定程度の国語力を身に付けている。しかし、それは体系的に身に付けたものでなく、個別的体験的に身に付けたものであるため、その能力にはすでに大きな差異が生じている。

そうした前提の上に義務教育における国語科の指導が行われることになる。そこにこそ、国語科教育の難しさがあると言える。

一つは、大きな差異があっても、児童・生徒が、「言葉そのものが使えない」わけではないため、日常生活における「不便」を感じないことである。そのことにより自らの国語力を高めることに対する必要感が見いだしにくくなってしまっているのではないか、といえる。

もう一つは、前述の理由から、児童・生徒の国語力が、授業で培われたものであるのか、日常生活において培われたものであるのかがわかりにくくなっている、ということだ。

学習指導要領では、国語の指導にあたっては、「言語活動を通して指導すること」が明示されている。このように、言語活動の充実が重視されている背景には、授業において身に付けた力が、授業に閉じていたことがあると考える。確かに、従来の授業が、「教材を教える」という視点に偏重していたことも否めない。

そうした反省を受け、現在では、「言語活動を通して指導すること」が一定の定着を見たように思われる。しかし、そのことにより、新たな課題が生じてきていると考える。その課題とは、「言語活動が目的化することにより、指導事項の定着が曖昧になっているのではないか」という点である。

言語活動は、児童・生徒の主体的な学習活動を促すという点において、大きなメリットがある。一方で、言語活動が目的化すると、本来の目的が隠れてしまうというデメリットもある。言語活動はあくまでも手段であり、指導事項の定着こそが目的であるということを忘れてはならない。

以上のことから、指導事項（「やるべきこと」）の確実な定着（「やれること」）を促す手段としての言語活動（「やりたいこと」）の適正化　が研究の視点となる。

中学校から見た課題

・国語においても 2 極化が進んでいる。
・音読に困難を抱えるレベルの層が増加。→音読の練習・チェック・フィードバック
・漢字を使うことに大きな課題がある。これは、下位層ばかりでなく、一定の理解力を有

　している生徒の中にも多い。→反復練習・既習の漢字をどんな場面であっても使う習慣づけ。
・意見交流等における対話力は、期によって大きな差がある。→ペア・グループ・一斉学習等における発表や､伝え合う活動の共同・協同・協働の在り方について共通理解を図り、徹底する。
・主述のねじれ等に対する認識が希薄。
・書字の汚さ。男子に多い。

言語活動を通して、文章の内容を理解できないままに単元を終えてしまう子どもが少数ながらいるところに課題がある。
文章を書くときの、構成
段落・句読点の位置等基本的な決まりがわかっていない。

国語科における「やるべきこと」→指導事項
国語科における「やれること」　→定着した指導事項

「やるべきこと」が、定着されて「やれること」に転化する。
※「やれること」の蓄積とは、指導事項の定着
　「やれること」の自覚とは、指導事項が定着していること（していないこと）を自覚すること
　ただし、指導事項の定着は、教材が変わる度にある程度チェックしなければならないだろう。※当該学年における指導事項は、継続して次の段階においても指導しなければ身につかない。

「やるべきこと」と「やりたいこと」とを近づける手段として、「言語活動」がある。

自律的な姿
　自ら言葉にはたらきかける
「やるべきこと」がわかり、進んで言葉で表現する姿　　今日の授業・・・ほぼ無い

　指導事項の習得
「やりたいこと」を見いだすための手だて
　「できる」という見通しを持つこと。

　比較・吟味　協同を通して・・・

言語化

目的の達成　言語活動を通して指導事項の習得がなされたか
やれることの拡充と自覚
言葉の価値に気付く

鑑賞文を書く活動を通して、根拠を明確に
モナ・リザ
　私がこの絵を見てまず感じたのは、「ミステリアスで神秘的である」（　　）。それは、描かれている女性の表情が、微笑んでいるにも（　　）、なぜか哀しげにも見える（　　）。また、表情ばかりではなく、女性の年齢もまた謎である。十代のようにも、三十代のようにも見える。（　　）、光のあたっている顔は若々しく見えるが、女性の服装や髪型は黒を基調としているため、落ち着きを感じさせるからである。さらに、絵全体のトーンが暗く、背景となる景色もどこか異世界のように感じられることも、ミステリアスな雰囲気を増幅しているように思える。
　この絵が世界的な「名画」とされるのは、このような多くの謎を秘めているからでは（　　）。

　この絵を見たとき、私は「魂からの叫び」を聴いたような気がした。それは、中心となる人物の顔つきや体の歪みから狂気を感じたからだ。また、人物の両手は耳を覆っているようにも見え、まるで自分の叫びを聞かないようにしているように思える。さらに、その人物の後ろに描かれている背景も大きく歪み、その人物との歪みと同化しているように感じる。その一方で、人物の立っている橋や遠くの人物が直線的に描かれていることから、「歪み」がより強調されている構図になっているように思う。色遣いも

事実と意見

鑑賞文を書くことを通して、根拠を明確にして書くことを学ぶ。

根拠を明確にして、美術作品の鑑賞文とキャッチコピーを書こう。

鑑賞文
対象となるもののよさを、根拠を明らかにして、論理的に説明した文章。

キャッチコピー

宣伝文句　感性に訴えかける

絵を見せてよさを書く。
箇条書きで書く。

第一印象「　　」

よく見ると・・・・
構成
色彩
表情
背景

これは、ある絵の鑑賞文です。どの絵についての鑑賞文でしょう。